

【添付資料】

2024 年 3 月 23 日（土）英語英文勉強会

津田塾大学名誉教授、椿清文先生は常勤 30 年非常勤 4 年の奉職をこの 3 月に終えられ、「大好きなジャズを皆さんにぜひお話して、ジャズの楽しさを味わっていただきたい」と仰ってご講義を始められました。

① シグニファイング(Signifying)とは

黒人が考え出した言葉遊びの文化。黒人が得意とする工夫を凝らした語りのこと。婉曲、暗示、誇張などを駆使して面白くメッセージを伝えようとする。素材 (original) を修正 (revise) することを楽しむ芸術。ジャズとは「signify する音楽」、シグニファイングとはジャズの本質を突く概念と言える。お笑い芸人のパフォーマンスは笑わせることが目的だが黒人のシグニファイングはもっと広くて深い。

1988 年ヘンリー・ルイス・ゲイツ・ジュニア (Henry Louis Gates, Jr.) が『The Signifying Monkey アフロ・アメリカン文学批評理論』の中で、黒人の言葉遊びの文化をアカデミズムの世界できちんとした研究として発表し、文学の中でどのように使われているかを分析している。文学以外でも、具体的な例として、サックス奏者ジョン・コルトレーン (John Coltrane) が演奏する“My Favorite Things”を例に挙げている。この曲はミュージカル映画“Sound of Music”の中で使われたリチャード・ロジャース (Richard Charles Rodgers) 作曲の 3 拍子の歌で、コルトレーンはこの歌を 10 回くらい即興で繰り返して、その度に微妙な違いを楽しみ味わっている。

② ジャズの誕生とその後の発展

ジャズは 1900 年頃、アメリカ南部ルイジアナ州の港町ニューオーリンズ(New Orleans)で生まれた。20 世紀と共に生まれたともいえる。20 世紀の初め頃は新移民が沢山入ってきてそれまでのプロテスタント一辺倒の国から多文化の国に変わりつつある時代。黒人も入ってきてジャズという音楽がより豊かになっていく。

1910 年代にグレート・マイグレーション(Great Migration)が起こる。第一次大戦時、北部の工業が大発展し大量の労働力が必要になり、南部の黒人たちが、人種差別が緩やかな北部に移っていった。黒人たちが目指した最大の都市はシカゴだった。黒人解放の歴史から見てグレート・マイグレーションは重要な出来事であり、ニューオーリンズのジャズ・ミュージシャンが主にシカゴに移っていったこともジャズの発展に重要な意味を持った。

1920 年代、ローリング・トゥエンティーズ(Roaring Twenties)という狂騒の 20 年代に入ると、男女交際も開放的になりジャズを聴きながらダンスをするというようなモダンなアメリカに変わっていく。その世代は Jazz Age または the Harlem Renaissance と言われる。

1930 年代、白人のビッグ・バンドが大活躍。グレン・ミラー(Glenn Miller)、ベニー・グッドマン(Benny Goodman)などが最高のダンス音楽を提供。専属のシンガーを雇いジャズ風にアレンジしたポピュラー・ソングを歌わせるようになる。ジャズが最もポピュラーになった時代。

1940 年代、ビバップ(bebop)という黒人の若者が始めた新しいジャズが登場する。非常に実験的で即興演奏を徹底的に行うという攻撃的アグレッシブなジャズのスタイル。

ビバップは黒人の若者たちのアメリカ社会に対する音楽的反抗だったとも言える。

1950~60 年代、モダンジャズの成熟。世界中でジャズが大きな関心と人気を博する。大恐慌、世界大戦を経てやっと訪れた豊かで平穏なアメリカの経済的繁栄の時代。しかし華やいで見えるのは白人に関することだった。公民権運動をきっかけに黒人たちが南部各地で立ち上がる。

1970 年代以降、フリージャズ(Free jazz)、フュージョン(fusion)、そして今にたどり着くが、ジャズは 50 年くらいの間に非常にユニークな面白い歴史をたどっていく。

③ アンセルメのジャズへの開眼 「A Serious Musician Takes Jazz Seriously」

エルネスト・アンセルメ(Ernest Alexandre Ansermet 1883-1969)は、1918 年にスイス・ロマン管弦楽団を作り 50 年近く常任指揮者をつとめたクラシック音楽の指揮者だったが、1919 年にジャズ・クラリネット、ソプラノ・サクソ奏者シドニー・ベシェ(Sidney Joseph Bechet 1898-1959)の演奏を聴いて驚嘆し、ジャズを讃える熱烈な文章を書いた。その中にはジャズの大事なことがすべて記されている。最高のジャズ批評と言える。

シドニー・ベシェは、ニューオーリンズでクレオール(Créole: 初期フランス移民の子孫)の家系に生まれた。偉大な才能の持ち主だったが 1930 年代末に音楽で生活できなくなりハーレムで洋服屋になる。その後渡仏して国民的人気を獲得。フランス、ヨーロッパでは即興の才能を持つ偉大な芸術家として、アメリカでは観客を楽しませる芸人、エンターテナーとして遇された。

(曲) Sidney Bechet Quintet “Summertime”(1939) ジョージ・ガーシュウィン(George Gershwin)が作曲した黒人が主役のオペラ “Porgy and Bess” で歌われる子守唄。Bechet は後半にグラウルという濁った音でヴェルディの『吟遊詩人』からの曲を引用してシグニファイニングしている。

アンセルメが発見したジャズの特質

1. 実際の演奏の中にこそ完璧な表現がある。

基本的に楽譜はない。あったとしても方向性を示すだけ。同じ曲の同じ演奏はない。演奏するたびに異なる。

2. ジャズの起源はアフリカにある。

白人の西洋音楽体系の中にアフリカの音楽体系が入っていったが、黒人の「古い本能」が

ジャズの即興演奏の中でよみがえった。ブルー・ノート (blue notes) という「ミ」と「シ」と半音下げることによって心に訴えるようなブルース風になる。黒人が「悲しみ」を感じる時、ブルースを演奏し歌い踊ることで悲しみを超越できる。ブルースは「黒人の精神」である。多くは長調の曲なので音楽としてはそんなに悲しい歌ではない。

なお、ブルースは 20 年代の中頃に広く演奏されるようになるが、その頃ブルースを歌ったのは女性ばかりだった。その後フェミニストがブルースを再発見、ブルースのフェミニスト的解釈も興味深い。

(曲) Sidney Bechet and His Blue Note Jazz Men “Blue Horizon” (1944)

3. クラシック音楽とジャズの違い

クラシックは演奏されるすべての音が譜面に書かれ、書かれているものをできるだけ正確に表現しようとする。ジャズはクラシックに対抗するもの。ジャズは演奏者が自由に演奏する余地が残されている音楽であり「音楽の余白」とはそのことを言っている。その余白を使って何か面白いことをする。即興性が命とも言える。

クラシックは 19 世紀の終わりから 20 世紀初めにかけて、その長い歴史を終えつつあった。アンセルメは当時ジャズという言葉は使っていないが、新しいポピュラーアートとしての歴史が始まると予見している。

ニューオーリンズ・ジャズを従来の枠を超えて大きく飛躍させたジェリー・ロール・モートン (Jelly Roll Morton 1890~1941) はクレオール・ピアニストだった。彼は「ニューオーリンズのジャズメンは常に新しい、新奇で滑稽な何かを探していた」と言い、ジャズで大切なことの多くが聞く人を楽しませるための「目新しい効果」(novelty effects) を求めた結果であった、と言っている。「半分満たされたグラス」は彼のアイデア。ジャズのメロディを担当する 3 つの管楽器トランペット、トロンボーン、クラリネットをベースにグループ表現として集団即興演奏 (collective improvisation) を発展させた独創性も偉大だった。

(曲) Original Dixieland Jazz Band “Livery Stable Blues” (1917)

1917 年オリジナル・デキシーランド・ジャズバンドによる演奏。馬のいななきを楽器で演奏している。楽器でいろいろな動物の声をまねしたりするのもよくあるシグニファイイング。

(曲) Duke Ellington and His Orchestra “In the Shade of the Old Apple Tree” (1933)

日本ではディック・ミネが歌ってヒットした「リンゴの木の下で」。この中にとてものなじみのある曲、ロッシーニの「ウイリアム・テル序曲」が効果的かつユーモラスに引用されている。他の曲からの引用もシグニファイイングの一例。

(曲) Duke Ellington and His Orchestra “East St. Louis Toodle-Oo” (1927)

1920年代末、デューク・エリントン楽団はニューヨーク、ハーレムの「コットンクラブ」の専属となり、ワイルドで官能的なジャングル・ミュージックによりニューヨーカーズを原始の世界へと誘った。その名声はアメリカ中、世界中に響く。コットンクラブを離れたのちもアメリカ中で演奏活動을 続け、エリントン楽団はジャズ史上最強のビッグ・バンドとなる。ミュート（mute：弱音器）を使った金管楽器の音色の変化を楽しむ特殊効果としてのシグニファイングが一世を風靡する。

（曲）Miles Davis Quartet “My Funny Valentine” (1956)

コール・ポーター（Cole Porter）作のポピュラー音楽だが、うっとりするようなピアノのイントロの後、マイルスのミュートが官能的な響きを聴かせる。

（曲）Charles Mingus Quartet “The Original Faubus Fables” (1960)

チャールズ・ミンガス（Charles Mingus）はモダンジャズの世界で異彩を放つベーシスト。黒人への人種差別に対する怒りが作品の根源にある。この曲は社会問題を取り上げてシグニファイした珍しい作品。1950~60年代の公民権運動の際に、公立学校における人種隔離を憲法違反と認めた最高裁の「Brown 判決」（1954年）に反対して“Stop the race mixing!”と唱えるアーカンソー知事フォーバス（Faubus）を「あなたは偉大な英雄だ、英雄に捧げるよ！」と歌詞をつけてからかい、ユーモラスに風刺の精神で抗議している。曲中アイゼンハワー、KKKの名前も挙げられ、「病めるアメリカ」すなわちアメリカ的イデオロギーの痛烈な批判が込められている。

④ シグニファイングについてまとめ（重要な2点）

○オリジナルの曲にリヴァイズを加え、おかしさ、意外さ、楽しさ、美しさなどを表す。ジャズには「元歌」というものがあるが、それをどのように面白く表現していくかを一生懸命に考えて努力をする。それがジャズという音楽。クラシックのような完璧な楽譜はない。例えば“Summertime”から何百もの表現が生まれるが、どれ一つとして同じものはない。

○聴衆に向けてのメッセージ。メッセージはジャズの本質。演奏者は即興でメッセージを考えて聴衆に伝える。ジャズでシグニファイングする、「ジャズのアドリブ」とは自分のメッセージを伝えるということ。

⑤ 交差するジャズとクラシック

アメリカの総合大学には音楽コースや音楽学科があり、その多くでジャズとクラシックのコースが用意されている。ジャズがクラシックに近い地位を与えられつつあるようだ。また、クラシックとジャズの垣根を超える試みがあちこちでなされている。ベルリンフィルのメンバー有志がジャズコンサートを行い、山下洋輔がピアノ協奏曲に挑戦するというような。クラシック音楽も新しい作曲家もあまりいないこともあり、ある意味曲がり角に来ているのかもしれない。

(曲) Nikolai Kapustin “8 Concert Etudes Op.40--7 Intermezzo” (1987)

ロシアの現代作曲家、ピアニスト、ニコライ・カプースチンはジャズとクラシックを融合した独特の作風を持つ。ジャズのイディオムをたくさん取り入れた演奏をしていて、クラシックの中にジャズっぽいところが出てくる。

これからジャズを聴いてみたい人にお勧めしたい曲を2曲ほど。

(曲) Dexter Gordon Quartet “Daddy Plays the Horn ” (1955)

デクスター・ゴードンはビバップからモダンジャズにかけて長い間活躍した偉大なテナーサクソ奏者。この曲は実はブルースで、12小節のくり返し (reprise) から成る。軽快感のあるリズムで楽しさが溢れている。楽器だけで演奏するブルースもたくさんある。

(曲) Bill Evans Trio “Waltz for Debby” (1961)

ビル・エバンスのオリジナルとして広く知られているジャズ・スタンダード曲。

(その他おすすめのアルバム)

- ・ Modern Jazz Quartet “No Sun in Venice” (1957)
- ・ Dave Brubeck Quartet “Dave Digs Disney” (1957)

⑥ 津田塾祭ジャズ・カフェ

2011 年以来、津田塾祭で学生たちとジャズ・カフェを出店している。東日本大震災で被災した陸前高田市のジャズ喫茶「h.イマジン」の復活サポートで始まり現在も続いている。今年も開催できると思うのでぜひお越しください。

Q&A から

Q：ジャズの未来はどうか？

ジャズ・ミュージシャンしげのゆうこさん「NY ではジャズは既に殿堂入りしている。Jazz is dead. (1970 年代マイルスの言葉) 黒人コミュニティの関心はヒップホップに変わって数十年、ビバップ以降、ジャズは黒人のコミュニティの音楽ではなくなった。カフェでジャズ・ミュージシャンだと紹介すると驚かれ、日本で秋田民謡の歌手と言ってるように扱われる」。

A：ジャズという音楽の独自の発展は 60 年代 70 年代で終わったのかもしれない。その後はほかの音楽と融合する形(fusion)で、様々に発展していった。黒人のコミュニティの音楽としてのジャズはすでになくなってしまったのかもしれない。ジャズはこれからは大学教育で学ぶ音楽かもしれない。しかし、即興でオリジナルをリヴァイズして楽しむというジャズの魅力は、決して消えてしまうことはない。今も多くの音楽家や音楽ファンをジャズは惹きつけている。

Q: 東京でおすすめのジャズクラブは？

A: ボディ & ソウル (渋谷)、JZ ブラット (渋谷)、コットンクラブ (丸の内)、サムデイ (新宿)、サムタイム (吉祥寺) など。ジャズカフェは玉石混交 (しげのさんから)

Q: ジャズが即興的なものの良さとすれば CD に残すのは化石のようなもの?

A: 何回も聞くと良さがわかる、即興と言っても何回も練習すること。

Q: 文学の中のジャズは?

A: アメリカの作家ノーマン・メイラー (Norman Mailer 1923-2007) のエッセイ「ホワイト・ニグロ」。彼は黒人的生き方にあこがれ、ヒップな生き方を目指した。黒人がアメリカのイデオロギーをぶち壊す。1950~60 年代にかけてアメリカの物質文明に反抗し自由な人間性の解放を目指した beat generation (ビート・ジェネレーション) の「ビート詩人」の若者たち。レイモンド・カーバー (Raymond Cleve Carver 1938-1988) の小説。どちらもその根底に黒人のヒップな生き方への憧れを感じる。

椿先生のお話を伺い、先生の著書『半分満たされたグラス』の中のジャズ年表の 1890 年~1969 年の次のページがないのはなぜだろう? と疑問に思ったことがわかった気がしました。ジャズ年表の次のページはなくても、“Jazz is dead” (ジャズの死) 以来、ジャズはあらゆる音楽のジャンルと交ざりあいながら刺激的に進化しているのだそうです。ジャズはまさに unlimited と感じました。

椿先生そしてアシスタントをつとめて下さった奥様の朋美さんありがとうございました。

「3/23 千駄ヶ谷同窓会ジャズ・カフェ (without coffee)」!!

穏やかな椿先生のご講義と素敵なジャズの音色に包まれて心豊かな幸せを感じる春の日の午後でした。